信濃名勝地誌

山口勇雄編

全

特31
179

024923-000-4

特31-179

信濃名勝地誌

山口　勇雄／編

M31

ADC-2217

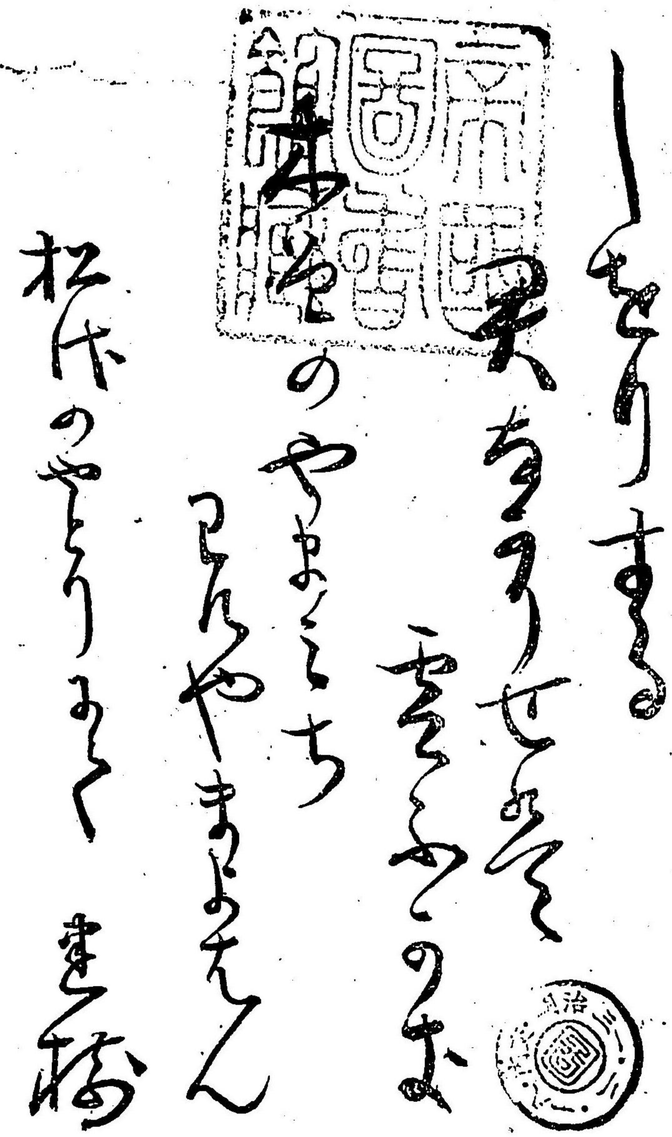
特31
1

大和田大人題訓
山口勇雄君編輯

信濃名勝地誌

東京書肆
松陽堂梓

特31
179



東京書肆
象陽堂
發行之印

序

我信濃ノ地、名勝鮮シトセズ、而シテ其誌亦乏シカラズ、然レ共童蒙ヲシテ讀マシムベキモノニ至テハ、未ダ嘗テ良好ノ書アルヲ聞カズ、山口象陽居士茲ニ見ルアリ、暇アルコトニ、躬ラ名邑ヲ訪ヒ、勝地ニ遊ビテ、其景狀ヲ記シ、來歷ヲ探リ、又教育ノ理ニ本ツキ幼童ノ心力ヲ察シテ、以テ信濃名勝誌ヲ作ル、其蒙ヲ啓クニ適スル

ヤ知ルベシ、抑モ此著ハ、童蒙ヲシテ獨リ信山ノ名勝ヲ知ラシムルノミナラズ、又其鄕國ヲ愛スルノ念ヲ涵養スルニ資スルノ大ナルヲ信ズ、因テ一言ヲ卷首ニ錄ス

正木直太郎識

序

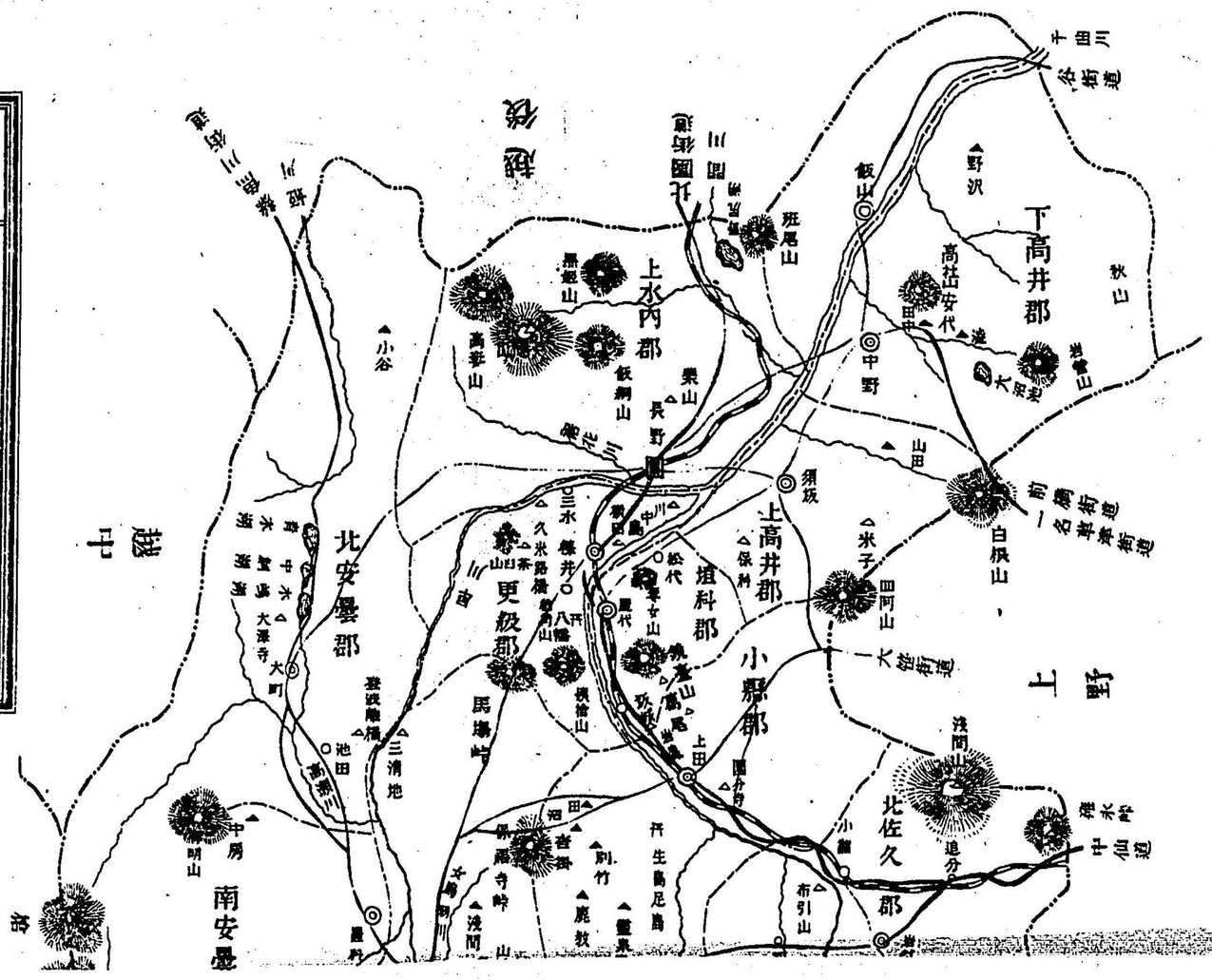
みすゞかる信濃の國ハ山高く水清きが上ゑ往古より國のひらけもおそからずくさぐさの物語ハ水莖の跡にも多かりまして近き頃皇國の產物の中にも外國人のもてはやすなる生絲の業ハいふも更なり萬の事日に月に進みゆくさまハ人よく知りたる事なるべしたのれ性遊歷そこのみわきて當國ハ概ね足跡をつけたる處とて見聞せることとも少おからず依りて今當國の地理を經とあし

歴史を緯となし茲に一巻の誌をものしぬ聊か斯の道のため盡すあらんと思へばありさいへ素より大方の需ゑ應ぜんとの希望ゑいあらで初學の徒の階梯とおさんとの意に過ぎざるのみ冀くい博雅の士幸に其足らざらんを補ひ誤らんを正し以て其目的を達せしめられよゑは此誌を編むにあたり我友某君の一方ならぬ補助を與へられしことを謝するゑなむ

明治三十年十月　　山口勇雄しるす

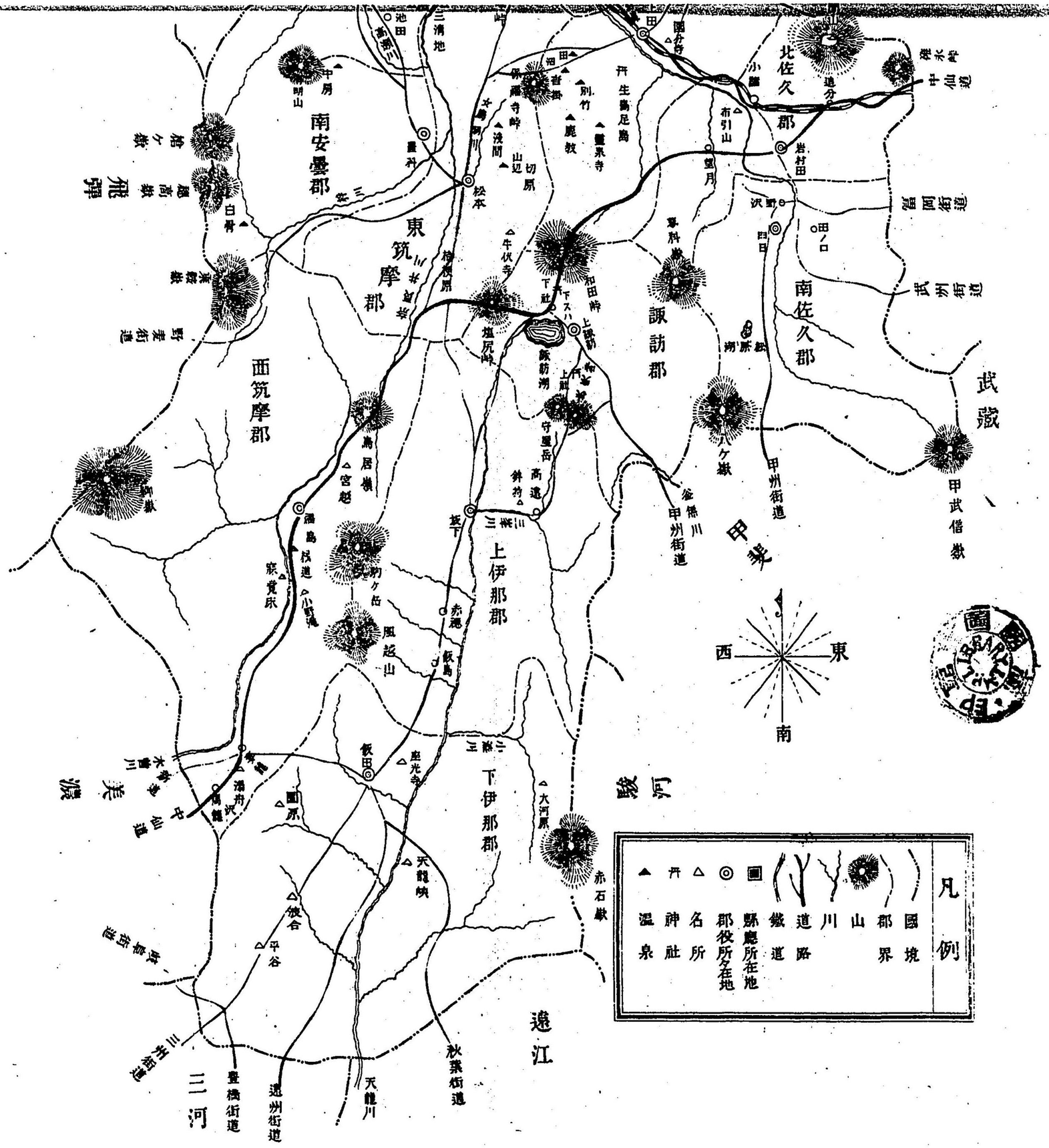
六十万分ノ一

信濃國全圖



より大方の需ゑ應ぜんとの希望よいあらで初學の徒の階梯とおさんとの意に過ぎざるのみ冀くは博雅の士幸に其足らざらんを補ひ誤らんを正し以て其目的を達せしめられよまは此誌を編むにあたり我友某君の一方ならぬ補助を與へられしことを謝するゑなむ

明治三十年十月　　山口勇雄しるす



信濃名勝地誌

目次

總論

(一)河中島地方

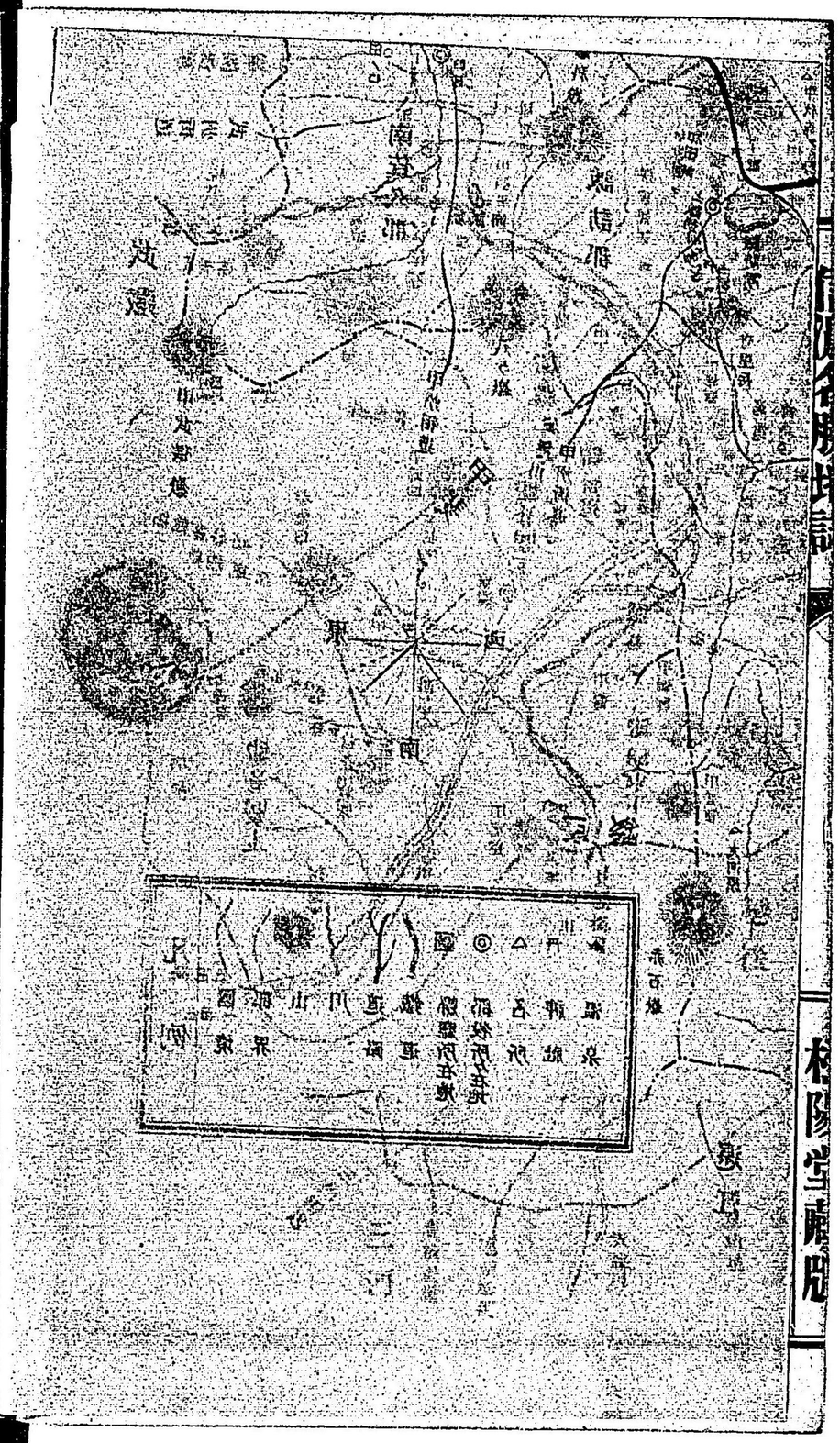
上水内郡　長野　善光寺の圖　藥山　戸隱山

野尻湖　久米路橋

下水内郡

飯山

下高井郡



中野　澁、田中、野澤、ノ温泉　秋山
上高井郡
須坂　米子の瀧　山田の温泉
保科觀音
埴科郡
松代　海津城の圖　妻女山　屋代
葛尾城址　岩鼻
更級郡
姨捨山　八幡社　篠ノ井　横田河原
河中島古戰場

(二)佐久小縣地方

小縣郡
上田　國分寺　生島足島神社
別所温泉
北佐久郡
小諸　布引山　淺間山　同上圖
碓氷峠　岩村田　望月牧
南佐久郡
臼田　田ノ口　松原湖

(三)諏訪地方

諏訪郡
諏訪湖　同上圖　上諏訪　諏訪神社

(四)伊那地方

上伊那郡　高遠　鉾持機道　坂下　赤穗

下伊那郡　飯田　今宮公園　元善光寺　園原

大河原　浪合　平谷　天龍峽　同上圖

(五)木曾地方

西筑摩郡　湯舟澤　小野の瀧　同上圖　寢覺床

木曾の棧道　福島　御嶽　宮ノ越

鳥居峠　駒ケ嶽

(六)松本地方

東筑摩郡　松本　松本城圖　淺間山邊の温泉

桔梗原　牛伏寺　三清地

南安曇郡　乘鞍嶽　有明山　白骨中房の温泉

豊科

北安曇郡　大町　大澤寺　三湖　小谷の温泉

登波離橋

目次

終

松陽堂藏版

信濃名勝地誌

總論

山口勇雄編

我信濃國ハ、東山道ニあり、東西四十三里、南北五十四里、人口一百廿万あり、日本帝國中の大國あり、東ハ上野、武藏ニ、南ハ甲斐、駿河、遠江、三河ニ、西ハ美濃、飛驒、越中ニ、北ハ越後國ニ隣る、國内ニは高山峻嶺相連なり、地勢一般ニ高峻なれば、此等の諸山より發する水ハ、次第ニ相聚まりて、數多の大河となり、隣國ニ流れ出でゝ、終ニ海ニ注ぐ、されば山川の形勢ニよりて、自然ニ六つの大區劃をなせり、河中島地方、佐久小縣地方、諏訪地方、伊那地方、木曾地方、松本地方これあり、余ハ、今より諸子と共ニ、順路ニよりて、此等の諸

松陽堂藏版

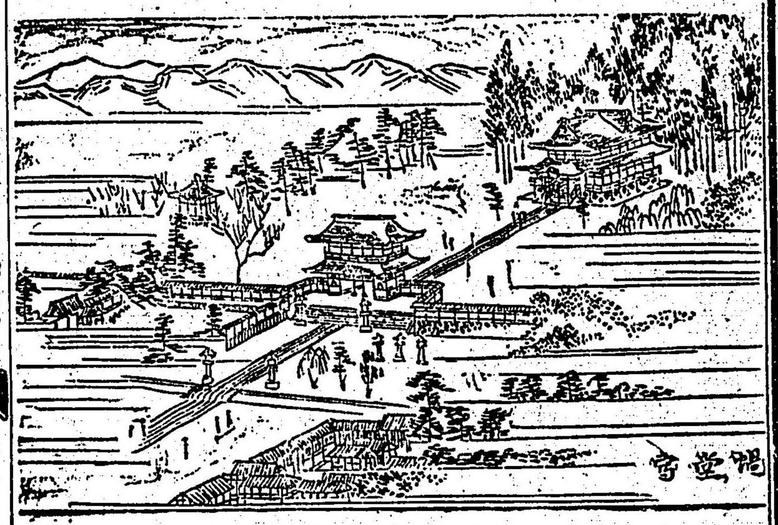
地方を巡り、名邑勝區を探らんとす、

(一) 河中島地方

河中島地方は、一ゝ善光寺平と稱し、最も北ゝあをて、最も廣き平野にして、東西三里、南北十數里あり、千曲川と犀川との合流する所ゝなて、末流東北方ゝ貫きて越後ゝ入る、西北の二方ゝは、飯縄黑姫、高妻、乙妻、斑尾の諸山峙ち、東南の二方ゝは、四阿、白根、岩菅、高社の諸山ありて、上野、越後の界ゝ續く、中に埴科、更級、上水内、下水内、上高井、下高井の六郡あり、信越鉄道は、佐久の平より來り、埴科、更級、上水内を貫きて、越後の直江津ゝ達す、

上水内郡

長野　長野市は、信濃國第一の大都會ゝして、縣廳のある所なを、



善光寺の圖

東京を距る六十里、人口三万二千、犀川の北岸大峯山の麓ゝあり北國街道ゝ當り、信越鉄道の大停車場ありて、物貨輻湊し、商業盛なり、縣會議事院、地方裁判所、區裁判所、市役所、郡役所、尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校、監獄署等あり、此地昔ゝ善光寺町と稱し、又佛都の名あり、蓋有名なる善光寺のあるゝよれを、善光寺は、今を距るを千三百四十五年以前、欽明天皇の御宇、

今の朝鮮の内よりし、百濟國より、献せし阿彌陀佛の像を、其後凡二十餘年、皇極天皇の御宇、伊那郡の人、本多善光なるもの、之を獲て、伊那郡座光寺村に置き、其後又堂宇を建てゝ、此處に移しゝに起れりといふ、爾後戰國の頃（今を距ること凡三百五十年）に及びて、武田信玄之を甲斐の甲府に移し、新善光寺を建て、武田氏亡びて、織田氏之を美濃の岐阜に移し、德川氏又之を遠江の濱松に移し更に甲府に復せしが、豊臣氏又之を京都の方廣寺に迎へ、他國に流寓すること、前後四十余年に及び、慶長三年八月に至りて、始めて故に復せり、今を距ること二百九十八年以前なり、其無比の靈佛なるを以て四方より來り拜するもの、常に絶えず、堂宇の燒くること屢々にして、現在のものゝ、元祿年間（今を距ること凡百九十年）德川幕府より、松代藩主に命じて、建築せしめしものなり、東西十五間、南北二十九間半、高さ十丈あり、宏壯無比の大伽藍なり、七年毎に盛大なる開帳を行ふ、今を距る五十一年前、弘化四年ゝ、恰も其年に當りければ、遠近より來り集るもの、甚だ多かりしに、三月二十四日、大地震あり、家倒れ、火起り、死するもの二千四百七十四人、内旅人千二百九人あり、本堂は幸にして倒れざりき、抑も、長野市繁盛の基は、善光寺にあり、明治四年、諸藩を廢して、縣廳を置きしより、其進歩非常にして、今は國中第一の地となれり、

善光寺の東にある丘陵を城山といふ、頂に健御名方富命、彦神別の神社あり、縣社なり、今上天皇陛下、御巡幸の際、御休息あらせられし處にして、善光寺平、一眸の中に集り、眺望絶佳なり、城山館といへる公會場、并に測候所あり、

往生寺ハ、西方少許ニあり、

藥山　長野の北方山中ニ入ること一里淺川村ニ藥山あり、岩壁高く天を摩して、刀もて削れるが如く、下ニ淺川の流を望む、其が中腹ある巖窟より、木を架出して、上ニ一堂を造り、少彦名神の石像を祭る、欄干により下を臨めば、目將ニ眩せんとす、人入るとき動搖するを以て、ブラシ堂藥師の名あり、河邊ニハ、石油の湧出するところあり、

くしのかみすくな彦名のつくりけん藥の山はくすし
きろかも　荒木田久老

戸隱山　長野市より、大峯山の溪間ニ入り、西北行して飯縄山麓ある、飯縄原を過ぎ、四里餘ニして、戸隱中社ニ達す、道路廣濶ニして、險峻あらず、寶光社、奥社ありて、鼎足の形をなせり、奥社ハ、中社を距ること三十丁、戸隱山の中腹ニあり、手力雄命を祭る、國幣小社あり、社殿雅潔、老樹鬱々として、山色深邃あり、戸隱山ハ、奥社の背ニ峙ち、巉巖兀々として、三十三窟あり各、其形貌ニ隨ひ、百間長屋、蟻の塔渡り、獅子岩等の名あり、是を表山と稱す、裏山ハ表山ニ連りて、北ニ延び、百丈瀧、千丈瀧、水晶塔、兩界岩等の奇あり、其最高の巔ハ、即ち高妻山ニして、海面よりの高さ、八千三十六尺あり、險しき所ニ至れハ、岩角を踏み、樹枝ニ攀ぢ、鉄鎖ニより、辛うじて歩む、夏季登山するもの多し、近傍ニ荒倉山あり、天延中（今を距る百九十年前八）平維茂ゞ平げし鬼女紅葉の棲みし所と云ふ、此地方を戸隱山中と總稱す、蕎麥ニ名あり、

神代櫻ハ、戸隱路邊、芋井村ニあり、長野を距ること一里許、稀有の古櫻樹ニして、根の周圍三丈餘あり、

野尻湖　長野町より信越鐵道により、六里を距る柏原驛に下車し、北國街道に沿ひて進めば、一里許にして、野尻湖に至るべし、此湖は、一に芙蓉湖と稱し、班尾山麓、信濃尻村にあり、周回三里十七町、其狀瓢の如し、湖中の小島を琵琶島といふ、辨才天を祭る、風光頗る佳にして、納涼に適せり、湖中の樅ヶ崎は、昔永祿七年三百三十年前上杉謙信の臣、宇佐美定行、謙信の姉の夫、長尾政景の謀叛の心あるを見、欺き招きて、舟に乘じ、湖上に出で、共に溺死せし所ありと云ふ、此地方氷蕎麥を產す、

久米路橋　長野の西南、犀川の上流四里許、水内村に久米路橋あり、又水内橋といふ、古へより著名あり、兩岸の岩壁、突兀として相迫る所に架す、長さ二十一間、高さ十餘間、近時までは、北岸に近く一屈曲をなして、頗る奇觀ありき、橋上より臨めば、碧流激して、岩を嚙みて走る、うもれ木は中蟲はむといふめれは久米路の橋は心して

行け　讀人不知

近傍に不動瀧、龍官岩等あり、橋の西端に、勝海舟翁の長歌を刻せる碑あり、其歌に曰く、

みすゞかる信濃の國は日の本のくぬちのうちにいやたかき國にしあれば峯聳え山重なりて久方の雲井に近く飛ぶ鳥もつばさをたわみあらがねのいはほふみ行くけものすら走るをあやみ谷川はくるめき流れ岸高くけづれるが如そばたちて渡るすべなみ路たえし處ろ多かるそが中に水内の橋は神業になれりと聞けり百傳ふ岩根を床にいとくしくかけ一橋ゆも萬代もゆゝきとたえず安らかに踏みな

らしつゝ諸人のゆきゝかよひて種々の世をはへぬらしいや高きこのみめぐみを知る人も知らぬもなべて神乘とたゝへて仰ぐかけはしぞこれ、

下水内郡

飯山　長野を距ること八里、千曲川の西岸に飯山町あり、各街道に當る、人口七千餘、郡役所區裁判所あり、飯山城ハ、町の東北端にあり、昔天正五年（三百二十一年前）上杉謙信自ら築き、家臣をして守らしめし所にして、其後屢々城主の變遷あり、享保二年（一百八十一年前）に至りて、本多氏之を領し、二万石を食む、維新の際、賊徒古屋作左衛門等、越後より侵入して、此城を攻めしが、松代藩兵の爲めに擊ち退けられたり、冬期ハ、積雪丈余に及び、信濃の最北にして、最も寒冷の都會なり、

下高井郡

中野　飯山より千曲川の東岸に渡り、谷街道を南に進むこと三里にして、中野町に至るべし、戰國の頃、高梨氏の居城にして、今は南方山上に城址を存す、德川氏に至りて、陣營を置き、維新の初に至りて、中野縣を置きし所なり、人口六千、郡役所あるを、稍繁盛なり、

澁、田中、野澤の温泉　上下高井郡の山中には、温泉多く出づ、中野町より夜間瀨川（又風川といふ）に沿ひて、谿中に入ること一里半にして、平穏村に、澁、安代、田中等の温泉あり、長野を距ること七里餘、道路の便あるを以て、浴客常に絶えず、澁よりは谿中に入ること

と里許ゝして、地獄谷あり、蒸氣岩孔より噴出し、濛々として天を蔽ひ、轟々として雷の如し、又澁より沓野を經、草津街道ゝ沿ひて上れゝ、里餘ゝして、鈴噛の瀧、琵琶池等あり、瀧は道の右ゝして、遙ゝ谷底ゝあり、高さ四十丈の大瀑なり、池は其形を以て名づく、風景閑雅なり、尚ほ山中ゝ進めば、大沼池あゞ、野澤の温泉ゝ、木島平の山中にあゞ、創傷ゝ特効あり、

秋山　東方深谷中ゝ、秋山と稱する別天地あり、昔し平氏の餘黨の竄匿せしところゝして、風俗言語大ゝ他ゝ異なゞ、

上高井郡

須坂　中野町より延徳の廣野を過ぎ、南行をること三里ゝして、須坂町ゝ達す、堀氏一万石の城市ゝして、今郡役所あり、人口五千、製絲の業頗る盛ゝして、烟突林の如く立つ、西方ゝ一丘あり、臥龍山と云ふ、一の勝地なり、

蓑堂　觀音ゝ、南方一里にあり、奇巖峙ちて、眺望佳なり、

米子の瀧　蓑堂より市川の流ゝ沿ひ、谿間を南行すること三里餘ゝして、米子の瀧あり、四阿山より發するの谿流、二條の瀑布となりて奔下す、相距ること凡一町、左を權現瀧と云ひ、高さ六十丈、右を不動瀧と云ひ、高さ九十丈あり、之を仰げば、恰も銀河の九天より落ち來るゞ如く、其聲山谷ゝ響きて凄ましゝ、瀧の下流數町ゝ不動堂あり、不動堂より又溪流ゝ沿ひ、亂石を傳ひて登ること三里ゝして、四阿山の巔ゝ達す、上野の國境ゝ峙ち高さ八千九百七尺あり、絶頂ゝ二社あゞ、上州宮、信州宮といふ、深谷の底、幽かゝ上野の村落を望む、又瀧の邊ゝ硫黄坑あり、頗

る良質のものを産し、近時、盛に採掘せり、

山田の温泉　須坂の東方山中三里、白根山麓に山田温泉あり、白根山の頂にある湯池よりゝ、硫黄を産す、

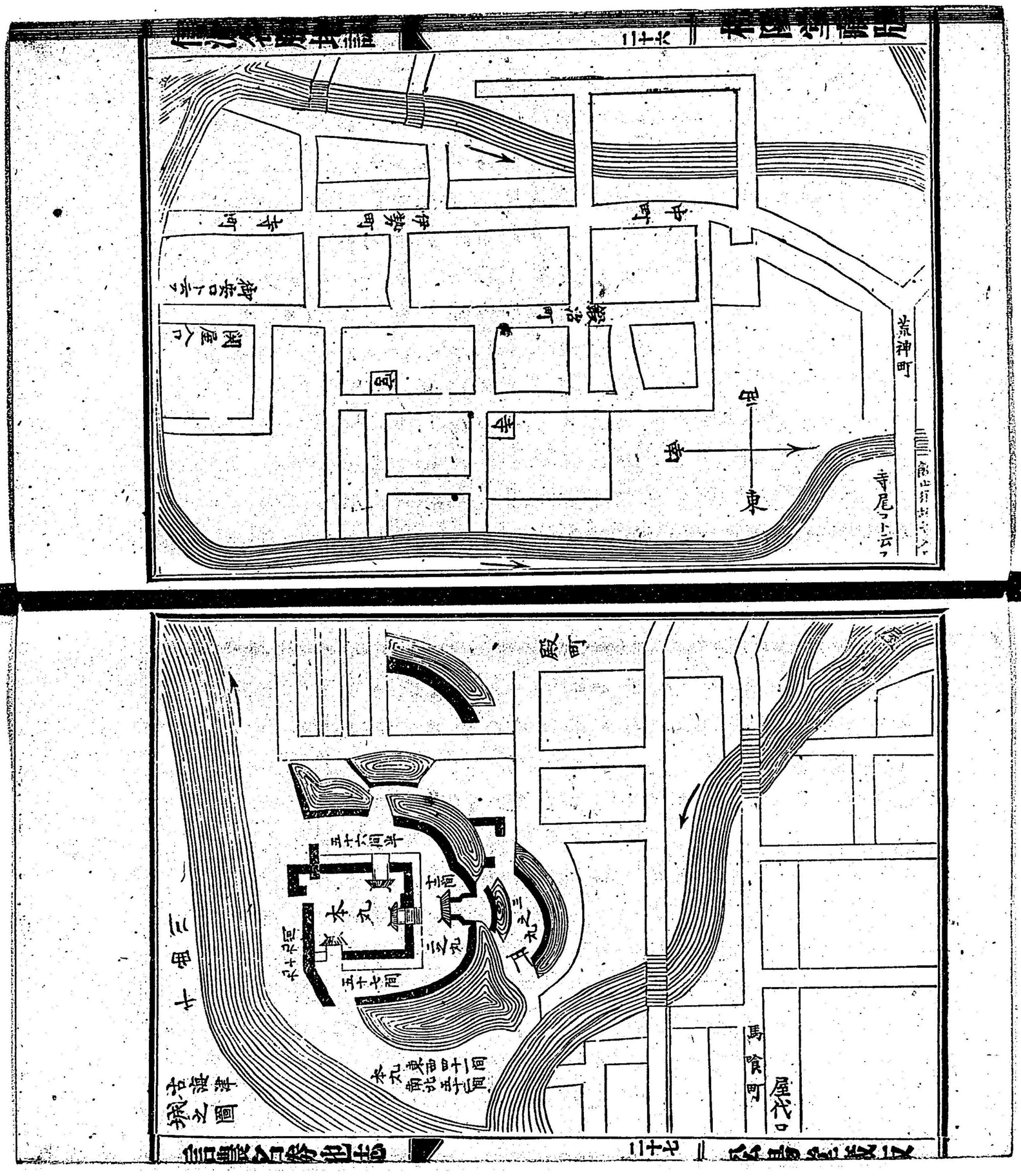
保科觀音　須坂町より谷街道に出で、南に行くこと二里餘にして、保科觀音あり、阿彌陀山清水寺と稱す、今を距る一千〇九十二年、前、平城天皇の大同元年、坂上田村麿の創建せし所にして、宏大なる伽藍ありしが、今ゝ荒廢して、僅かに、奥院、中院、三重塔を存するのみ、

埴科郡

松代　須坂より、西南行すること四里半にして、松代町に達す、長野を距ること三里にあり、松代城ゝ、古へ海津城と稱し、武田信

玄の臣、山本晴行の築きし所にして、市街の北にあり、千曲川に枕み、河中島の戰に關して著名あり、後、洪水の害を避けんが爲め、河道を改めしかゝ、今ゝ遙に西方を流る、後、上杉景勝に屬し、徳川氏に及びて、森、松平等を經て、元和八年（二百七十五年前）眞田信之、上田より移りて、十万石を食み、信州第一の大藩として、頗る繁盛の、城市なりしが、廢藩の後、交通の不便なるが爲め、漸く衰ふ、人口八千餘あり、製絲養魚の業盛なり、有名なる佐久間象山は、此地の人なり、博學にして、砲術に精しく、徳川氏の末年、盛に開港の説を唱ひ、後、京都に趨き、會津藩士と往來して、大に謀るところあらんとし、人の爲に殺さる、

白鳥山ゝ、市街の南方にありて、藩祖を祭るの社あり、壯麗なり聞く、駿河の久能の社を模したるものなりと、象山ゝ西南端に


伊勢町
本町
荒神町
東
西
馬喰町
屋代口
殿町
本丸
二之丸
三之丸
西丸
馬場
濠
櫓
門
橋
土塁
石垣
津藩城郭図

峙てる小丘として、眺望絶佳を以て稱せらる、清瀧い、東方半里
よあり、水量大からずと雖も、岩貌頗る奇幻あり、

妻女山　松代より、谷街道を西行すること半里にして、妻女山あ
り、清野村にあり、河中島の戰、上杉謙信此に陣營を張り、海津城
に炊烟の起るを望みて、夜密に山を下り、武田の軍を逆襲せし
所なり、北方河中島を隔てゝ長野に對し、又信玄の營所ありし
茶臼山に面す、眺望頗る佳あり、招魂社あり、明治戊辰の役に、松
代藩士の戰死せしものを祭る、

つまめ山つまを忘れて武夫が鎧かたしき幾夜ねにけむ　海上胤平

屋代　松代より、西行すること二里にして、屋代町に至りこゝに
北國街道に合す、郡役所あり、東方の山を一重山といひ、有名な
り、

花ゝなは名のみありけり一重山八重にかさなる峯の白雲　中務卿

葛尾城址　屋代町の南、北國街道を行くこと三里にして、坂城村
あり、東北の山上に、葛尾の城址あり、戰國の頃、村上義清、威を信
濃に震ひし時、據りし所なり、

岩鼻　坂城より、又南行すること一里余にして、千曲の兩岸漸く
狹き處に、岩鼻あり、岩壁高く聳えて、將に倒れんとし、道路僅に
其下を通ず、頗る風景に富み、夏の螢、秋の紅葉、皆有名なり、

岩鼻やこゝにも一人月の友　芭蕉

更級郡

姨捨山　姨捨山は、屋代を距ること一里半、千曲川の西にあり、冠着山、一名更科山の稱あり、觀月の勝地なり、麓の丘に庵あり、放光院長樂寺と號す、堂名を滿月殿と云ふ、姨石と名つくる巨巖峙ち、傍に老桂樹あり、田毎の月の名あり、北方を望めば、河中島の平野遠く亘り、千曲の流其中を貫き、風景頗る佳なり、東埴科郡の鏡臺山に對す、仲秋の夜、月其頃に出づ四方よりを來りを賞するもの甚だ多し、姨捨の月は、古昔よりを著名にして、古歌多し、

我心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て　讀人不知

月見れば衣手さむし更級や姨捨山の峯の秋風　鎌倉右大臣

さらしなや姨捨山の高根よりを嵐を分て出る月影　家隆

佛や姨一人泣く月の友　芭蕉

八幡社　姨捨山の北半里にして、八幡の社あり、武水別命を祭り、縣社に屬す、境内老樹蓊鬱として、社殿壯麗なり、毎年十二月十日より十四日迄、大祭を行ふ、近傍の村落より、異樣の扮裝をなし、行列して、其雜沓非常なり、之を遷祭といふ、三百餘年の間絶えず、之より北半里、稻荷山町は、商業稍盛なり、

篠ノ井　屋代町の北一里、千曲川の北岸に篠ノ井あり、鹽崎村に屬す、郡役所のある所なり、近傍に康樂寺、長谷寺の古刹あり、

横田河原　塩崎より、千曲川に沿ひて下ること半里にあり、今を距る七百十六年前、源平の頃、木曾義仲、城長茂と戰ひて、之を破りし所なり、

河中島古戰場　更級郡の平野に、往昔、武田、上杉二氏の激戰せし所なして、有名なる古戰場なり、八幡原、典厩寺等、當時の遺跡あり、當時、田圃開けゝ、人烟稀なりしが、德川氏の初め、松代侯松平忠輝の臣、花井主水、地勢を視、犀川の上流、犀口と稱する所より、三個の溝渠を通じて、之を千曲川に注ぎしかゝ、忽ち水利を得て、田圃開け、今に人家相望むに至れり、

鞭聲肅々夜過河　曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍　流星光底逸長蛇

賴山陽

分兵謀已泄　亦不發探騎　卒然失爪牙　無奈兒郎易
違衆納仇女　用茲終得君　箕陣報平昔　今日只荒墳
敵情得於人　明鑒炊煙　不進擊半渡　至今惜武仙

於茂知詳證　甲兵殲河側　河霧懷當日　徘徊情未極

佐久間象山

(二) 佐久小縣地方

河中島北方より、千曲川に沿ひて上れゝ、佐久小縣地方に出づ、千曲河源のある所なり、廣さ松本地方に次げり、東北に碓氷峠、淺間山あり、南に八ヶ嶽あり、西に蓼科嶽、和田峠あり、原野多くして、牛馬を牧す、信越鐵道に、碓氷峠を貫きて、上野より來り、小諸上田を過ぎて、河中島地方に達す、

小縣郡

上田　松代より、千曲川に沿ひて、北國街道を上ること八里にし

て、上田町あり、上田城は、もと眞田氏の祖先なる海野氏の築きて、居りし所にして、千曲川の深淵に突出し、尼ヶ淵の城と稱せり、後、村上義清に敗られて、東方の山中に入る、關ヶ原の役起るや、眞田昌幸、子、幸村と之に據り、德川秀忠の軍を防ぎて、通せさらしむること數日、遂に之を捨てゝ西上せしめき、眞田信之の松代に移るや、仙石氏之に居り、次で松平氏之を領し、五万三千石を食む、城址は今公園となり、藩祖を祭れる松平神社あり、人口二万一千、商業繁盛にして、郡役所、區裁判所、尋常中學校、蠶業學校、監獄署等あり、信州第三の都會なり、上田原は、村上義清、武田信玄と戰ひて大敗せし所なり、此地方、蠶卵紙、絹織物を以て名あり、赤松小三郎は、此地の人にして、佐久間象山に從ひて學び、西洋兵式の師となり、後、京都に於て殺さる、

國分寺　上田の東南二十五丁に、國分寺あり、三重の古塔を存す、昔聖武天皇の諸國に令して、國分寺を造らしめられし時の建築にして、方三間、高五丈八尺あり、今を距ること千百五十餘年あり、初めて壯大なる堂宇、立列ひしが、屢々兵燹に罹りて、今たゞ僅かに之を存するのみ、近傍の田圃中、往々古瓦を獲ることありと云ふ、行基作の大茶碗、及び稱德天皇の諸寺に分附し給へる、百萬塔等を藏す、毎年一月八日、參詣する者多し、八日堂の藥師と稱す、

生島足島神社　上田の南方二里、東鹽田村に生島足島神社あり、有名なる古社にして、縣社に屬す、

別所温泉　上田の西南三里に、別所の温泉あり、浴客多し、中に石湯なるものあり、岩石を穿ちて、浴槽となす、北向觀音堂あり、市

街の西端ある安樂寺よりは、四重八面の古塔あり、其他此地方より田澤、沓掛、鹿教、靈泉寺等の温泉相連なる、

北佐久郡

小諸　上田よりを、おほ千曲川に沿ひて、上ること五里にして、小諸町あり、淺間山の麓に位す、市街の西南隅に、山本晴行等の築きし城址あり、鍋蓋城或いは穴城と稱し、要害堅固を以て有名なりき、德川氏の時に至り、屢々城主の交迭を經て、元祿十五年（百九十五年前）牧野氏之に移り、一万五千石を領す、城趾い、今、懷古園と稱し、牧野神社あり、藩祖を祭る、人口八千、商業盛なり、

布引山　小諸を距ること、西方一里半にして、千曲川の南岸に、布引山釋尊寺あり、僧行基の開きし所にして、懸崖空に聳え、奇幻

淺間山の圖

極をなし、岩面に白條あるを、恰も布を引けるに似たるを、岩窟に沿ひて、堂を作るを、觀音を安置せ、郡内有名の勝地なり、

淺間山　淺間山は、上野に跨り、本邦著名の火山にして、高さ八千二百三十尺、頂常に白煙を吐く、火口の周圍約十二町、深さ約一百間あり、數々大噴火をなし、害をなすこと少なからず、天明三年（百十三年前）の時の如き灰を降らし、熱泥を流し

街の西端ある安樂寺よは、四重八面の古塔あり、其他此地方よ田澤、沓掛、鹿教、靈泉寺等の温泉相連なる、

北佐久郡

小諸　上田よを、なは千曲川よ沿ひて、上ること五里よして、小諸町あを、淺間山の麓よ位す、市街の西南隅よ、山本晴行等の築きし城址あを、鍋蓋城或ハ穴城と稱し、要害堅固を以て有名なを き、德川氏の時よ至を、屢々城主の交迭を經て、元祿十五年（百九十五年前）牧野氏之よ移を、一万五千石を領す、城趾ハ、今、懷古園と稱し、牧野神社あを、藩祖を祭る、人口八千、商業盛なを、

布引山　小諸を距ること、西方一里半よして、千曲川の南岸に、布引山釋尊寺あを、僧行基の開きし所よして、懸崖空よ聳え、奇幻

淺間山の圖

極をなし、岩面よ白條あをて、恰も布を引けるよ似たを、岩窟よ沿ひて、堂を作を、觀音を安置を、郡内有名の勝地なり、

淺間山　淺間山は、上野よ跨り、本邦著名の火山よして、高さ八千二百三十尺、頂常よ白煙を吐く、火口の周圍約十二町、深さ約一百間あり、數々大噴火をなし、害をなすこと少なからず、天明三年（百十三年前）の時の如き灰を降らし、熱泥を流し

上野の諸村を害し、死するもの二千に及びたりといふ、麓に原野多く、追分原、雲場原、馬杭原、御牧原等あり、夏季登山するもの多し、登山するに二徑あり、一に小諸より谿谷中に入り、四里餘にして、頂に達し、一に小諸の東三里なる、追分驛より、追分原を過ぎ、三里餘にして頂に達す、小諸よりするもの、最も容易なり、山頂より眺望すれば、南に富士山あり、東北に上野の諸山あり西に飛驒、越中の界なる連山を見、塵俗の氣、自ら散ず、眞樂寺に、其麓鹽野村にあり、淺間山別當と唱ひ、宏壯なる寺院なり、塩野の官林に著名なり、

雲はれぬ淺間の山のあさましや人の心を見てあそやまめ　かき

信濃なる淺間が嶽に立つけむりをちこち人の見やはと

がめぬ　業平

いたづらに立やあさまの夕けむり里とひかぬる遠近の山　雅經

碓氷峠　追分より中仙道を行くこと、三里餘にして、碓氷峠に至る、昔日本武尊蝦夷征伐（一千七百八十七年前）の歸路、東を望みて、吾嬬者耶とて、妃弟橘媛を悲しみ慕ひ玉ひし所にして、其後、新田義宗と足利尊氏と戰ひし所なり、昔しの道路嶮峻にして、通行容易ならざりしが、其後、屢改修し、今は又トンネルを穿ちて、アプト式の鉄道を通じたれば、困難は昔の夢となれり、古道の巔に、熊野神社あり、巔を下りて向側に、古關の址あり、其邊楓樹多く、晩秋の候に至れば、全山紅錦を纏ひ、風景絶佳なり、又麓なる輕井澤は、夏の頃の氣候清冷なれば、内外人の避暑に來るもの多し、

山の名いろをひとといへどいくちしほそめて色こき峯の紅葉ば　讀人不知

うすひ山ゆきてい見ぬまひろひこし紅葉の色まさをと知らるゝ　通躬

岩村田　輕井澤より、中仙道を西行すること五里まして、岩村田町に至る、昔内藤氏、一万五千石の城市まして、人口五千、郡役所區裁判所あり、近傍まは、足利氏の頃、此地方の豪族たりし、大井氏の居城の址あり、

望月牧　岩村田町より、中仙道を西行すること三里まして、望月村あり、此地方の原野を望月御牧と稱す、古昔、信濃國は、著名なる牧馬の地まして、王朝の頃い、總て十六の牧場あり、毎歳八十頭を貢せり、後鎌倉の頃まと及びて、一層盛大となれり、望月の御牧い、就中名高くして、古歌多し、

あふさかの關の清水に影見えて今やひくらむ望月の駒　紀貫之

望月の駒よを遲く出つればたゞ〳〵ぞ山は越えぬる　素性法師

吾妻よを今日逢坂の山こえて都まと出る望月の駒　後京極攝政

南佐久郡

臼田　岩村田より南二里、千曲川の西岸まと、臼田町あり、郡役所のある所あり、養魚の業盛あり、此地より上を、川上と稱し、蕎麥まと名あり、

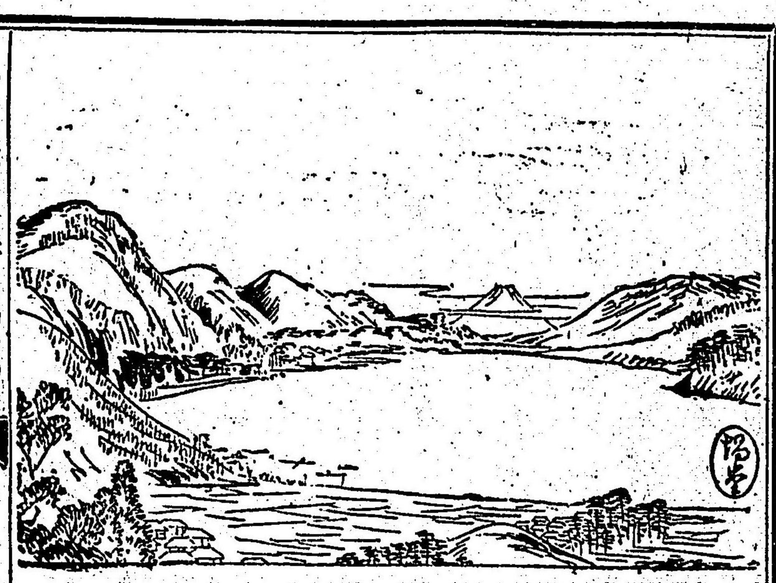
田ノ口　白田の東、千曲川を渡りて、一里半ばして、田ノ口村あり、又龍岡と稱せり、昔寶永元年百九十三年前大給氏、參河の奥殿より移りて、之に居る、一万六千石（内三州の故地四千石）を食みし所なり、南方山中に、大日向村あり、磁鐵鑛、寒水石、石綿等を産す、

松原湖　白田の南方數里、八ヶ嶽の東南、北牧村に、松原湖あり、風景に富む、湖畔に諏訪神社あり、

(三)諏訪地方

佐久小縣地方より、中仙道に沿ひて西行し、和田峠を越ゆれば、諏訪湖の邊に出づ、これを諏訪地方とあす、古昔、諏訪國と稱せしとあり、氣候寒冷にして、生糸、寒心太を産す、温泉多し、

諏訪郡



諏訪湖の圖

諏訪湖　諏訪湖は、一に鶴湖と稱し、周圍四里廿二丁あり、翠巒四面を圍みて、倒影を涵し、漁舟其中に棹して、風景絶佳あり、東南一帶山稍低き所、富士山を望む、

なかのある衣ヶ崎を來て見れば富士の上こぐあまの釣舟

空海

冬に至れば、一面堅氷を結び、人馬通行す、

駒とめて諏訪のと渡る旅人の氷の橋の音やさやけき

家　長

湖中、鯉、鮒、蜆、鰻、鮀、鰕、等を産す、漁業によりて生活するもの一千戸、湖邊、製糸の業盛にして、本邦第一と稱せらる、

上諏訪　湖の東岸に、上諏訪町あり、又、高島と稱し、古來諏訪氏三万二千石の城市にして、頗る繁盛の都會あり、城い、もと湖中に築きしものありと雖も、今は、湖水を距ること數丁にあり、其址い高島公園と稱し、眺望頗る佳あり、此邊に衣ケ崎あり、人口九千餘にして、郡役所、區裁判所、實科中學校あり、長野を距ること二十四里、岩村田を距ること十四里、市中温泉多し、

諏訪神社　湖の南北相對して、上下諏訪神社あり、信濃第一の大社にして、官幣中社あを、上代の頃、大國主神の第二子、健御名方命、天孫に從順せざりし時、健甕槌神等之を攻め、遂に此地に逐ひ到りしかゝ、進退こゝに谷まり、再び背かじと誓ひて、こゝに住を玉ふ、即ち此命を祭りしあを、諏訪氏い、其後裔あをと云ふ、上社は、上諏訪町の南二里、中洲村にあり、背に守矢嶽を負ふ、下社い、上諏訪町の北一里、下諏訪町にあを、春宮、秋宮の二祠あを、社殿宏壯美麗あり、六年一回、御柱祭を行ふ、近國よを群集するもの夥しく、混雜名狀す可らず、

(四) 伊那地方

諏訪湖の水、西に決して南流し、遠江國に走る、之を天龍川といふ、其兩岸は、即ち伊那地方あり、西に駒ケ嶽の峻嶺あり、東に赤石高さ一万二百十四尺の高山あり、概ね山谷にして、平地少なし、上下伊那郡に分つ、

上伊那郡

高遠　上諏訪町より南行して、杖突峠、或ハ松倉峠を越え、六里餘ヨリして高遠町ニ達す、町ハ三峯川ニ臨み、德川氏の時、内藤氏ニ居り、三万三千石を領せり、高遠城ハ、一ニ兜城と稱し、武田信玄の將、馬場信房之を築く、天正十年（三百十六年前）武田氏の、織田氏の爲ニ攻滅せらるゝや、武田勝頼の弟、仁科信盛、織田信忠の軍を此ニ防き、奮戰して自殺せしところあり、後、保科、鳥居諸氏を經て、内藤氏ニ至れり、今は城樓を毀ちて公園とす、内ニ藤原神社あり、藩祖を祭る、長野を距ること二十九里、維新後、稍衰ふ、人口五千あり、坂本天山は、此地の人ニして、砲術を以て名あり、五郎山ハ南ニあり、仁科信盛を葬りしところあり、

鉾持神社ハ、西高遠町ニあり高燥ニして、老樹茂れり、昔し社殿を此地ニ移しゝ時、地中より神鉾を獲しを以て名くといふ、

鉾持棧道　高遠より三峯川ニ沿ひて下れば、鉾持棧道あり、長さ四十三間、幅二間、碧流下ニ激し、斷崖上に峙ち、奇岩磊々として風景頗る佳なり、

坂下　高遠より鉾持棧道を過ぎ、六道原、大宮原を經て、三峯川ニ沿ひて下ること二里半ニして、天龍川の西岸、伊那村字坂下ニ達す、參州街道ニ當り、郡役所、區裁判所、簡易農學校あり、

赤穗　坂下の南方四里ニ、赤穗村あり、稍繁盛の市街あり、尚ほ南二里ニハ、飯島村あり、明治の初め、伊那縣を置きしところあり、

下伊那郡

飯田　坂下より天龍川の西方、參州街道を下ること十一里にして、飯田町に至る、信州最南の都會にして、氣候温暖、もと堀氏一万七千石の城市あり、人口一万三千あり、尾張、美濃、參河、遠江に通ずる要路に當り、商業頗る繁盛あり、郡役所、區裁判所、尋常中學校、監獄署等あり、飯田城は、一に長姫城といひ、市街の東南にあり、其址を公園となす、市中の某寺に、烈婦阿藤の墓あり、四時香華絶ゆ、又、有名なる儒者、太宰春臺は、此地に生れし人なり、

今宮公園　飯田町を距ること北方十數丁に、今宮公園あり、風越山の麓にして、郊戸神社の境内に接し、廣濶にして、天然の雅致に富む、内に風越館といへる公會所あり、

元善光寺　飯田の東方、里許、座光寺村に、元善光寺あり、

園原　飯田の南、參州街道を行くこと三里にして、駒場驛あり、駒場より右折して、谿谷中に入ること一里餘にして園原あり、往古の國道に當る、古へは、美濃國より、神御坂の峻嶺を踰えて、伊那郡に出でたり、此坂は、昔日本武尊の經過せられし時、白鹿出でゝ害をなしゝかば、蒜を眼に擲ちて、之を殺されたりしところあり、後、元明天皇の和銅六年（千百八十九年前）新に岐蘇の路を闢かれたりしも、其後おほ久しく國道となれりといふ、園原ハ著名なるところにして、古歌多く、伏屋、帚木、木賊等を併せて詠せり、

そのはらやふせやにおふるはゝきゞのありとは見えてあいぬ君かな　是則

とくさかるそのはらやまの木のまより磨かれ出る秋のよのつき　仲正

姿見の池、長者屋敷等と稱する古跡あり、

大河原　飯田の北數里より、天龍川を越え、小澁川に沿ひて、東南山中に入ること數里にして、大河原あり、昔南北朝の頃、信濃の宮、宗良親王の潛みて、足利氏を亡ぼすの計を、運らされしところなり、親王此處に住み玉へる時の歌に、

われを世にありやと問ひ信濃なる伊那と答へよ嶺の松風

いはで思ふ谷の心もくるしきに身を埋木と過す也けり

浪合　駒場の南三里、參州街道に浪合あり、宗良親王の子、尹良親王、下總より參河に赴かんとして、此處を過ぎける時、賊徒に圍み攻められ、自殺せられし處にして、其墓今存せり、

平谷　浪合の南數里に平谷あり、武田信玄の遺骸を葬りしところといふ、浪合、平谷、皆山中にして、道路險惡なり、

天龍峽　飯田の南方二里に天龍峽あり、天龍川の兩岸相迫り、絶壁高く聳え、奔流岩に激し、翠松鬱々として、長橋空に懸る、風景非凡あり、橋名を姑射といふ、

天龍峽の圖

姑射橋

姑射橋上來、
地僻身自靜、
何必方外尋、
人間有仙境、
日下部鳴鶴

(五)木曾地方

飯田より西行し、山を踰えて進めば、八里餘にして、木曾川の畔、中仙道、妻籠驛に出づ、此川の兩岸を木曾地方とおす、流に沿ひて下れば、即ち美濃の國あり、西に御嶽あり、東に駒ヶ嶽、風越山あり、木曾の山林は、本邦第一の大林にして、現今帝室御料林たり、沿岸十數里に亘り、良材多し、古へは、五木停止法と稱し、檜、檜、槙、横、明檜は、みだりに伐採することを禁じたり、又、馬を産す、木曾駒の名あり、此地方を西筑摩郡といふ、古へ美濃に屬せり、

西筑摩郡

湯舟澤　妻籠驛の南二里、馬籠驛より山中に入ること一里余にして、湯舟澤あり、兼好法師の住みしところありといふ、兼好は、足利氏の頃の人にして、有名なる徒然草の著者なり、

思ひたつ木曾の麻衣淺くのみ染て止べき袖の色かは

兼好

小野の瀧

小野の瀧　妻籠驛より、木曾川の東岸に沿ひて、中仙道を北行すること、八里にして、路傍に小野の瀧あり、高さ六七丈、

つま木こる小野の名しるき瀧おれや山かすかゐる中ゝ
音して　烏丸光榮

寢覺床　小野の瀧を去りて、北行すること數丁ゝして、上松驛の南ゝ寢覺牀あり、巨巖雪の如く白く、千狀萬態をなし、木曾川深く其間を穿ちて、深碧を湛ゆ、風景絶佳あり、屏風岩、烏帽子岩、獅子岩、浦島太郎釣舟岩等の名あり、臨川寺の庭より之を俯瞰すべし、昔し三歸翁といふもの、此處ゝて魚を釣りて樂みしを世の人、浦島太郎といひしとかや、

たひ枕かを寐ものうき夜の夢の孫さめゝかゐる松風の
音　烏丸光榮

谷川の音ゝは夢も結ゝじを寢覺の牀とたれ名付けむ
近衛家熙

木曾の棧橋　上松の北一里半、懸崖聳えて、道絶えたるところに棧道あり、下ゝ碧流を臨み、風景佳あり、昔は木橋ゝして、頗る危嶮なりしが、德川の初め、尾張侯、有司ゝ命じて、石を疊みて、土を敷かしむ、長さ五十六間、幅三間四尺ありき、後屢々改築して、今い安全の大路となれり、

わけくらず木曾のかけはしたえ〳〵ゝ行末深き峯の白
雲　後京極攝政

あやふさゝ名のみ殘りて今更ゝ渡るゝ易き木曾のかけ
はし　讀人不知

かけはしや命をかけむ蔦かつら　芭蕉

福島　上松より北二里半ゝして、福島町あり、昔木曾義仲の幼時、中原兼遠によりしところにして、其子孫、木曾氏と稱して、世々

居住せしところあり、德川氏の初め、木曾氏斷絶し、其老臣山村氏之に居り、七千五百石を領して、尾張侯に屬し、命せられて關門を守る、今其址あり、市街ハ川の兩岸に跨り、人口五千、郡役所、區裁判所等あり、義仲の墓、及び木曾義康の據りし古城あり、

御嶽　御嶽ハ飛騨の界に聳え、高さ九千八百四十一尺、福島町より溪流に沿ひて上ること九里餘にして、頂上に達す、飛騨に向へる處は、懸崖にして、瓦斯を吐く、頂にハ四時雪あり、御嶽神社を祭る、四望すれば、淺間山、八ヶ嶽、駒ヶ嶽、富士山并に飛騨、越中の諸山、皆眼中に入る、夏季登山するもの多し、

宮の越　福島より北行すること一里半にして、宮の越驛あり、東端に木曾義仲の城址あり、對岸に、德音寺あり、木曾氏の遺物を藏す、

鳥居峠　宮の越より、おほ北に行くこと二里にして、鳥居嶺あり、御嶽神社の遙拜所ありて、鳥居を立つ、因て嶺の名とす、昔し、木曾義昌、武田氏の兵を逆へ擊ちて、破りしところあり、

駒ヶ嶽　上松より、東方山中に入ること、四里餘にして、駒ヶ嶽の頂に達す、高さ七千八百〇八尺、翠松、花崗岩の白色と、相映して、景色絶佳あり、三十六峯、八千溪の稱あり、頂に駒ヶ嶽神社を祭る、駒嶽夕照、横川秋月、風越晴嵐、棧道朝霞、小野瀑布、寢覺夜雨、御嶽暮雪、德音寺晩鐘を木曾八景と稱す、

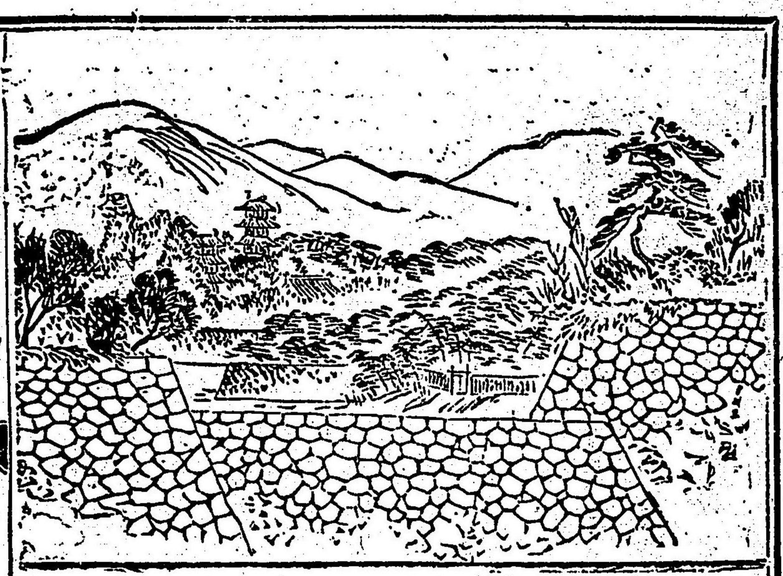
(六)松本地方

木曾地方より、鳥居嶺を越えて北行すれハ、松本地方に出づ、奈良井、梓、二川の合流して、犀川となるところあり、西に乘鞍、鎗ヶ嶽、穗

高等の高山重疊して、飛騨、越中の界をなし、東へ鹽尻峠、保福寺峠、猿馬場峠等を經て、諏訪、小縣、更級、上水内の四郡に入るべし、東筑摩、南北安曇の三郡に分ち、河中島地方に伯仲せる平野あり、

東筑摩郡

松本　鳥居嶺より、奈良井川に沿ひて下ること四里にして、櫻澤あり、東西筑摩の界とおす、又行くこと五里半にして、松本町に達す、古への國府のあるしところにして初め深志と稱す、鎌倉の頃より、小笠原氏世々之に居る、松本城へ、戰國の時永正元年（三百九十三年前）小笠原の族、島立右近の築きしところにして、小笠原氏敗れて後、武田氏に屬し、其後暫く上杉氏に屬せしが、復び小笠原氏の有となり、德川氏の時に至て、石川、水野諸氏の交迭を經て、享



松本城の圖

保年間（十八百七年前）戸田氏之に移り、六万石を食むに至れり、今、尚ほ、天主閣を存し、古への名殘を留めたり、明治の始め、筑摩縣を置きたるが、後、廢たて長野縣に合せ、郡役所、區裁判所、尋常中學校、監獄署、稅務管理局、第十五聯隊兵營、葉煙草取扱所等あり、女鳥羽川、市街を貫流し、人口二万九千餘あり、信州第二の都會あり、市街の

西北は城山偕樂園あり古への蟻ヶ崎の城址はして、風景佳なる長野を距ること十六里、上田を距ること十二里あり、長沼宗敬ハ、此地の人はして、德川氏の初の頃、軍學を以て一流を起し、長沼流といひ、一時天下を風靡せり、

淺間山邊の温泉　松本の東は、淺間山邊の二温泉あり、淺間ハ、古へ、犬飼の御湯と稱せしものあり、山邊ハ、古へ東間の御湯と稱せり、又白糸の出湯とも云ふ、

わきかへりもえてそ思ふうき人は東間のみゆか富士の
けぶりか　殷富門院

又山邊村は桐原の牧あり、佐久の望月と、もは、其名著ハる、

逢坂のせきの岩角ふみおらし山たち出る桐原の駒
太宰大貳高遠

桔梗原　松本町の南方の原野を桔梗ヶ原といふ、武田、小笠原二氏の古戰場あり、

ものゝふのくさむすかばねとしふりて秋風寒し桔梗ヶ原
加藤宇摩伎

牛伏寺　松本より南三里はして、鄕原驛あり、鄕原より東一里許、片岡村は、金峯山牛伏寺あり、至德二年（五百十二年前）源豊重の草創は係り、現在の堂宇ハ金堂、釋迦堂、牛堂、二王門等あり、金堂は、十一面觀世音を安ず、厄除觀世音と稱するものこれあり、唐版の般若經を藏す、傳へ云ふ、古へ赤黑の二牛は、經を駄して來りしは、伏して動かざりしかは、此處は一堂を建てたりと、

三清地　松本より犀川は沿ひて、下ること五六里、生坂村は三清地の奇景あり、犀川の兩岸相迫り、絶壁高く聳え、碧水縵く廻る、

紅葉の候、舟より棹して、此間を下れば、其快誠に喩ふ可からず、松本より更級郡三水に至るまで、十四里の間、舟運の便あり、

南安曇郡

乘鞍嶽　松本より西、梓川に沿ひ、飛騨に通ずる野麥街道を行くこと、凡十里にして、乘鞍嶽(九千百〇九尺)の麓に達す、絶頂に舊火口あり、道路は甚だ嶮なりと雖も、夏季登山するもの尠からず、此山雷鳥多し、

有明山　南北安曇の境に、有明山あり、信濃富士の名あり、登山するもの多し、

夏深き岑の松か枝風こえて月かけすゝし有明の山

慈鎮和尚

白骨、中房の温泉　白骨温泉は、梓川の上流、乘鞍嶽の麓にあり、中房の温泉は、有明山の麓にあり、古へ、坂上田村麿、中房山の凶賊を討滅せしことありしといふ、

豊科　松本より越後に通ずる、絲魚川街道を北行すること三里にして豊科村あり、郡役所のある所なり南安曇地方は秋蠶種の産地なり

北安曇郡

大町　豊科より、絲魚川街道を北行すること、六里餘にして大町に至る、大町は戰國の頃まで、仁科氏の世々居住せし所にして、其祖を醍醐天皇の皇子、若宮親王とす、今、郡役所區裁判所あり、商業盛なり、

大澤寺　大町の西北一里半許、平村に神龍山大澤寺あり、坂上田村麿の創建せし所なり、古へゝ、堂宇壯觀を極めたりしも、近時稍衰ふ、されど風致深邃にして、又、一個の仙境なり、

名に、しおふ法の契も大澤にちりをへたゝて年をふる寺

三湖　大町の北一里にして周回二里許の木崎湖あり其西岸に、仁科氏の古城の跡あり、其北に周回半里余の中綱、二里余の青木の二湖、順次に連る、四山の風光明媚なり、

小谷の温泉　大町より、北行すること十三里許にして、小谷の温泉あり、近傍に尾丸、鬚切の二瀑ありて一の勝地なり此地方に、姫川の流域にして、一區劃をなせり、姫川の末に、越後に流入す、

登波離橋　大町の南二里半にして、池田町村あり、大町に於ける市街なり、池田より東方に入ること一里半にして、登波離橋あり、山腹岩石突兀として、歩み能はざる所に架す、長さ三十八間、幅三間あり、斷崖深さ幾仞なるを知らず、下瞰すれば、股爲めに震へんとす、又渡蟻落橋とも呼ぶ、

大町より、大町街道を東北行して、十二里半を經、復び長野市に至るべし、余輩へこゝに信濃名勝の巡遊を終へたれば、暫く諸子と袂別せん、

信濃名勝地誌 終

明治三十一年一月二十九日印刷
明治三十一年二月十日發行

松陽堂發行證

編輯者 長野縣信濃國埴科郡松代町千百十六番地 山口勇雄
印刷兼發行者 東京市日本橋區濱町二丁目十一番地 池村鶴吉
發行所 東京市日本橋區濱町二丁目十一番地 松陽堂

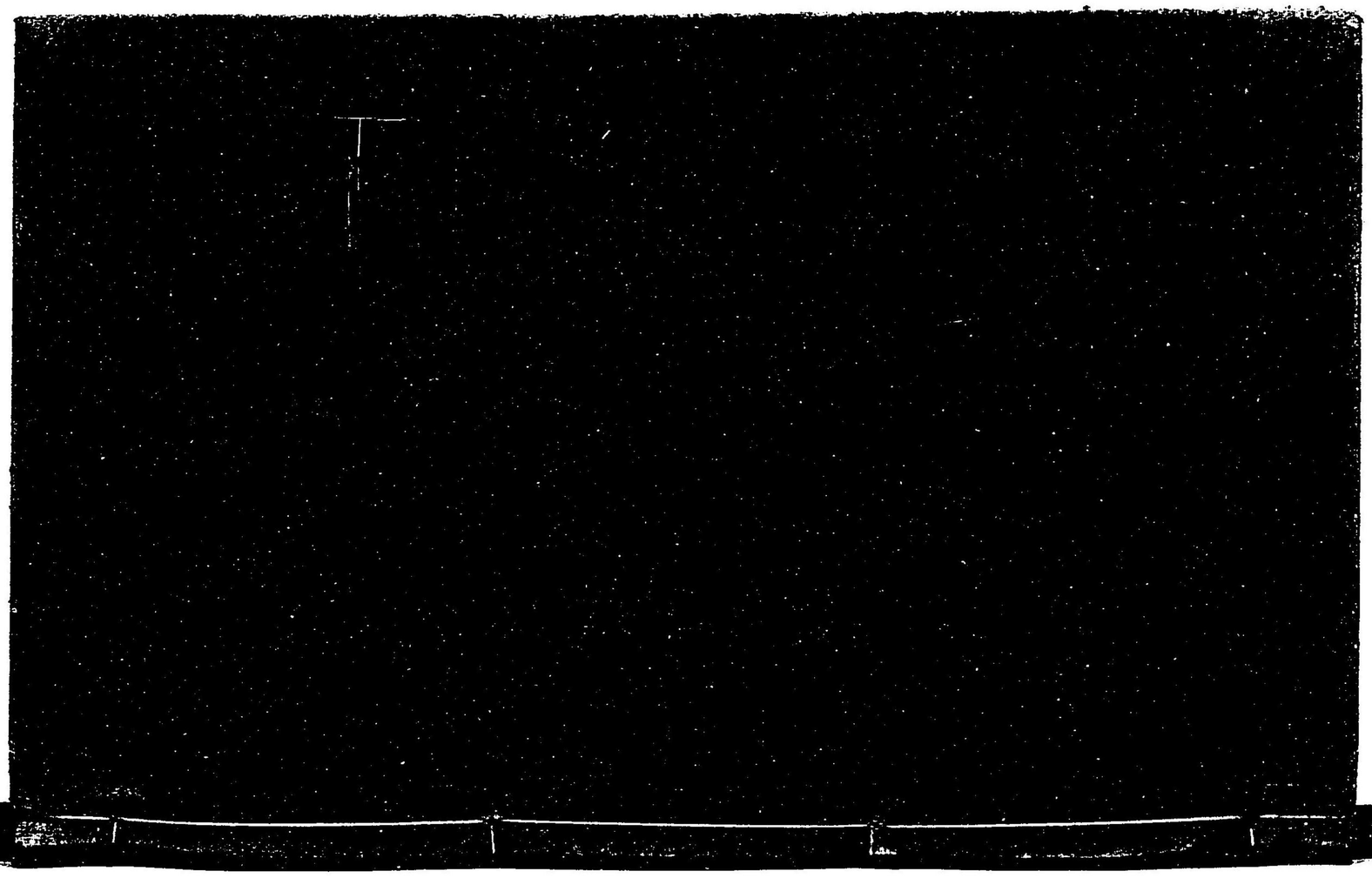
特別大販賣所
松葉軒 長野市大門町一丁目 西澤喜太郎
上田原町 西澤支店

東京賣捌處

金櫻堂
上原才一郎
杉本七百九郎
西村富二郎
服部喜太郎
柏屋書店
小林喜右衛門

各地賣捌處

長野市　荻原書店
同　增屋書店
同　協和堂
上田町　高野屋書店
同　現金屋

同　荷山
紹代
松田茂二郎
同　濱屋峯次郎
倶坂三郎
中野重兵衛
飯山藩
小山廣文堂
同　相塲七左衛門
松本　高見甚左衛門
松本　水琴堂書店
松田　鶴林堂
同　榮堂
小出喜作
中村平兵衛

上田　日新堂
白鳥民也
高田儀三郎
吉田遠田
長田忠之介